

江島由裕 (大阪経済大学経営学部教授)

藤野義和 (九州国際大学現代ビジネス学部准教授)

発達障害とアントレプレナーシップ

日本ベンチャー学会誌 No.33

pp.25~39 2019.3.

1. 本論文の特徴

本研究の特徴は、何よりも日本のアントレプレナーシップの文脈で発達障害を論じたことである。この分野への大きな一石を投じ、今後の研究の扉を開いたとも言えよう。発達障害の症状を有する起業家という未開の研究環境の整備に着手し、そして起業家的行動と発達障害の症状の特徴に関係性を見出していることは大きな特徴である。

2. 構成と内容

本論文は6つの部分から構成されている。問題意識、先行研究の整理、調査デザイン、調査事例の描写、命題の提示、今後の展望である。

本研究の問題意識として、世界において起業家的行動プロセスと発達障害に関する研究は、幾分かは存在しているものの顕著な発展が見られないこと、されば日本における実態調査や実証研究も少ないことを挙げている。

続く先行研究の整理では、発達障害について主に ADHD と近年自閉症スペクトラムという用語に置きかえられた PDD について、本研究で扱う範囲と種類を説明している。その後、発達障害とアントレプレナーシップに関する先行研究として、まず起業家の特徴を心理学的アプローチで達成動機を用いて解明しようとしたこの分野の端緒を紹介し、その後に精神分析学や

認知的視点から研究する流れにつながったことを説明する。そして徐々にではあるが研究は進み、世界では ADHD と起業家的志向性 (EO: Entrepreneurial Orientation) の関係についての研究が蓄積されるようになってきた。先行研究の成果として、ADHD の特性や資質がそれぞれ組み合わせりながら起業家的行動に結びつくメカニズムを徐々に見出しているとしている。しかしながら日本では、エビデンスに基づく研究が殆ど行われておらず、顕著な研究の進展がなされていないことがこの領域の課題であるとしている。そしてフィールドを日本に絞り、資質論的アプローチから発達障害とアントレプレナーシップの関係性を分析することをテーマとし、次の3つのリサーチクエスションを設定している。1. 発達障害の症状をもつ起業家の数と起業に至るプロセスはどのようなものか、2. 特質すべき資質は何か、3. この資質をどのように工夫して起業や事業運営に活用しているか。

調査デザイン。初めに書籍やウェブサイトなどから関連するキーワードで発達障害をもつ、またはもつであろう起業家 20 名のデータベースを作成。このうち障害を公表している起業家は 12 名で、分析対象としている。対象の特徴としては小規模のサービス業を事業としている方が多く、診断については ADHD・ADD・AS の傾向が強いことであった。

この対象者の内、資料が豊富な 2 名が選出され、両名の資質の特徴や起業の経緯・事業の内容について丁寧に描写がなされた。その結果として次の4つの発見事実を提示している。1. 一般的な組織での就労が困難であること。2. 診断をきっかけに発達障害の事実を受け入れそれを個性として伸ばしたこと。3. こざわりと集中が

学習に良い効果を生み出すこと。4. 一見弱点に見える資質を成果に結びつける力に変える調整道具（触媒）を見つけていること。

結論として次の5つの命題が提示された。

1. 発達障害でみられる衝動性や過集中また固執性といった資質は起業家的な行動に影響を与えている。
2. これらの資質は高い学習意欲を呼び起こし専門性を高め高生産性を導く。
3. 発達障害であるとの診断はこれらの力の発揮をより促進させるきっかけとなる。
4. これらの良い傾向は資質を理解する利害関係者が触媒となる。
5. 衝動性のうち機能的衝動性は起業家的な行動と正の関係を有し、機能不全衝動性は負の関係にある。

最後に今後の展望また残された課題として、次の点を挙げる。本研究の対象者は症状が軽度で、行っている事業が小規模であるものに限られていること。そのため、組織が拡大した後のマネジメントについては検討できていないことであるとする。

3. 意義と評価

本研究の最も大きな意義は、過去にビジネス書などで取り扱われはするものの、学術的研究の進展は大きくなかった分野に一石を投じ、日本においてこの領域をまさに開拓した点である。

イノベーションは既存知の組み合わせにより、既成の組織や社会に新しいものを提供することにその本質を見出す。そのためには不断の深化と探索が欠かせない。前者については社会常識にとらわれず好きなことに対して驚異的な集中力を見せるなどといった固執性が重要な要素になると考えられる。また後者に関しては、衝動性が大きな後押しとなるのではないだろう

か。イノベーションに不可欠な行動に関する特質を有する存在が、適切な支援者と起業という文脈を得ることにより、大きな成果を見出すことが示唆された。

本研究が破壊と創造が共存するいわばトリックスターのような存在を学術的手法で日本において見出したことは高く評価できる。そして起業家個人の資質を丁寧に読み解き、アントレプレナーシップと関係性を見出すことができたのは、江島氏のこれまでのEO研究の積み重ねがなければ不可能なことであったと考えられる。（国士舘大学 21 世紀アジア学部教授 中山雅之）